# 23) 1才未満で発見されるNB例—マススクリーニングの効果として

沢田　淳，杉本　徹，田中輝房

（京都府立医大小児科）

昨年4月より厚生省の指導下で全国的にマススクリーニングが実施されはじめた。これまでに当研究班でえられた成績から，乳児期のマススクリーニングの実施により，1才未満に何例のNBが発見され，何例に治癒が期待できるかについて考察した。欧米でのNBの全小児がん中に占める割合は6.6～7.7%，15才未満の小児での頻度は7.6～10.6例/100万小児・年で94,340～131,579人に1例，わが国では9.8%で小児がん登録から推測された頻度は8.2/100万小児・年で，121,951人に1例であった。京都市ではマススクリーニング実施後に13.3/100万小児・年で75,188人に1例であった。1才未満のNBの割合は日本，アメリカとも全NBの約25%で，その頻度はトリノ市の報告では32.4例/100万乳児・年であったが，マススクリーニングの実施している京都市では54.6%で，93例/100万乳児・年であった。小児期のNBの頻度は京都と欧米で大差がなかったが，1才未満の乳児期のNBの頻度は約3倍で，マススクリーニングの実施後約3倍の乳児NBが発見されると期待される。一方，わが国の15才未満の小児数は昭和58年には2,688,675名であったため，NBの年間発生数は220例（26883675×8.2/100万）と予測される。生後6カ月乳児のNBマススクリーニングで発見される頻度は，当研究班の成績では，16,500～18,900乳児に1例と報告された。昭和58年度の出生数が1,508,670名であるため80～91例がマススクリーニングで発見される。これまでのNB集計では全NBの25%が1才までに発見されている。6カ月以内に約半数，残りが6～11か月で何らかの症状の出現のために発見されている。すなわち，このような状況で年間55例が発見されることになる。これらを合わせると135～146例で全NBの61.4～66.4%に相当する。京都市の乳児期の発生頻度に当てはめると乳児例が140例となりよく一致する。当研究班でスクリーニングにより発見され，長期間経過の観察された25例の治癒率は92%であったゝめ，1才未満で発見される例は全NBの約65%に相当することから，全NBの治癒率が約60%に達すると思われ，予後の改善に重要な役割を果たすと期待される。

しかし，乳児期マススクリーニングを実施しても約35%のNBが発見できないことが明らかで，今後，これらの例に対する早期発見を考える必要がある。

1才未満の神経芽細胞腫例の算出

| 全NB | 220例 |
|---|---|
| 症状あり或いはスクリーニング前に発見 | 55例（25%） |
| マススクリーニングで発見 | 80～ 91例（36.4～41.4%） |
| 合　　計 | 135～146例（61.4～66.4%） |
| 京都市の頻度から算出 | 140例（63.6%） |

【文　献】

1) Sawada. T. et al：Med. Pediatr. Oncol. 12：101, 1984.

2) 沢田　淳他：日本医事新報，投稿中

**検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用**
**論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります**

昨年4月より厚生省の指導下で全国的にマススクリーニングが実施されはじめた。これまでに当研究班でえられた成績から,乳児期のマススクリーニングの実施により,1 才未満に何例のNBが発見され,何例に治癒が期待できるかについて考察した。欧米でのNBの全小児がん中に占める割合は6.6～7.7%,15 才未満の小児での頻度は7.6～10.6 例/100 万小児・年で 94,340～131,579 人に 1 例,わが国では 9.8%で小児がん登録から推測された頻度は8.2/100 万小児・年で,121,951 人に1例であった。京都市ではマススクリーニング実施後に13.3/100 万小児・年で75,188 人に1例であった。1 才未満のNBの割合は日本,アメリカとも全NBの約25%で,その頻度はトリノ市の報告では32.4例/100万乳児・年であったが,マススクリーニングの実施している京都市では 54.6%で,93 例/100 万乳児・年であった。小児期のNBの頻度は京都と欧米で大差がなかったが,1 才未満の乳児期のNBの頻度は約3倍で,マススクリーニングの実施後約3倍の乳児NBが発見されると期待される。一方,わが国の15 才未満の小児